第３章　アサバスカ大学遠隔教育学修士（Master of Distance Education）プログラム

吉田　　文（メディア教育開発センター）

アサバスカ大学の遠隔教育修士（Master of Distance Education, 以下MDEとする）プログラムは1994年に設置された。同年に設置された経営学修士（MBA）プログラムとならんで、アサバスカ大学におけるはじめての大学院プログラムである。MBAそのものは、遠隔教育でなくともオン・キャンパス型の教育においてもきわめてポピュラーであるが、遠隔教育の修士学位の教育プログラムは、オフ・キャンパスかオン・キャンパスかを問わず珍しい大学院プログラムである。事実、遠隔教育の修士号プログラムは北米ではこのアサバスカ大学を除いてはなく、全世界においても５つしかないきわめてユニークなプログラムである。こうしたユニークなプログラムがそのような経緯で設置されたのか、そのプログラムの特色はどのようなものか、また、こうした教育はどのような社会的需要に支えられているのかなどについて、以下、検討しよう。

１．設立の経緯・目的

カナダを含んだ北米では、遠隔教育が盛んであることは周知のことである。しかし、教育を遠隔に行う場合のその効果的な方法についての研究は行われているが、それらの理論的な知見をもとに教育プログラムを開発したり、さまざまな技術を用いた教授技能のトレーニングを実践できる人材は、驚くほど限られていたというのが、MDEの設置が求められる大きな要因であった。すなわち、遠隔教育にさまざまに関わる人々の専門的な技能を高めることを目的としてこのプログラムは開発されたのである。それは、単に学校という場で遠隔教育に従事する人々だけではなく、たとえば企業や官庁で各種の研修を担当するような人々にも有効だとされた。なぜなら、そういったところでは研修も遠隔で行われる場合が少なくないからである。

とくに、遠隔教育の世界は、離れた時間と空間を結ぶために各種の技術を用い、その技術は日進月歩で発展している。そうした技術発展に対応して効果的な教育方法を編み出すことが、遠隔教育の従事者には強く求められるのだが、実際に、そのための再教育・再訓練の場は少ない。組織的に継起的に遠隔教育の専門教育や訓練を行うために、MDEは設置された。したがって、研究者養成のための修士プログラムでなく、実践家養成のためのプログラムである。

２．入学要件

MDEへ入学するには、認定された後期中等教育機関における修了証書（バカロレア）をもっていることが必要である。修士号の前提となる学士号については必ずしも必須条件とはなっていないが、所持していればその成績証明を提出するし、所持していない場合でも、本人がそれまでの教育や職業経験が学士課程教育に相当すると考えれば志願することは可能である。

志願者は、１）卒業した高等教育機関の成績証明、２）職場の専門家からの推薦状３通（そのうち１通は、志願者のアカデミックな能力を証明できる人物からの推薦状が必要とされてい

る)、3）志願の動機、学習の関心領域、特定のスキルの習得希望などについての質問紙への回答、4）履歴書などに、5）志願料50カナダ・ドルを添えて、9月の新学期の半年前、すなわち3月1日までに提出しなければならない。

また、一般に大学院入学に必要なTOEFL、GREなどのテストは課されていない。

しかし、基本的にはアカデミックな能力を基準として選抜するため、選抜から漏れる者もかなりいる。6ヶ月の審査期間に3人からなる委員会で書類審査をおこなうが、発足当初の94年は約60人の志願者のうち合格者は半分弱であったし、98年の実績では志願者120人中合格者は80人程度でしかない。

時間と空間という障壁をできるかぎり取り除くことを目的としている遠隔教育の場合、教育機会の開放という観点は、通常の教育以上に重要であり、それはこのMDEプログラムでは、アカデミックな能力の証明を意味する学士号や大学院入学のための標準化されたテストを要件としないということにまで及んでいる。だからといって、アカデミックな能力を重視しないというわけではない。教育経験に職業経験も加えて提出された書類から入念にその能力の審査がおこなわれるのである。

教育機会の開放という視点は、正式の学生とならずにノン・プログラム学生という立場でコースをとる方法を設けていることにもみられる。正規の学生と異なり、何の志願要件も課されず、それぞれのコースに余裕のあるかぎり自由に登録が可能である。だが、正規の学生と同様の方法で学習し、同様の方法で評価をうける。この評価は、もしノン・プログラム学生が正規の学生となった場合には、正式の単位として加算される仕組みになっている。

学習へのアクセスの容易さ（Accessibility)、柔軟さ（Flexibility）をモットーとする遠隔教育ならではの配慮であるといえよう。

3．コンピュータへのアクセス

このプログラムで学習をする学生は、正規の学生かそうでないかにかかわらず、一定の条件をみたすコンピュータ・システムを用意せねばならない。それは自宅からアクセスするために自前で用意する場合もあれば、職場のコンピュータを利用して職場からアクセスする場合もあろう。いずれにせよ、遠隔の距離を埋める手段が主としてコンピュータである以上、それは何よりの必須条件である。

その最低条件とは、本体として1）IBM・PCかそれと互換性をもつIBM386、2）メモリーが4MBで空きメモリーが1.1MB以上、3）フロッピーディスク・ドライブ、4）マウス、5）2400バウンドのモデムが必要であり。OSはMS－DOS3.1かWINDOWS3.1が求められる。だが、より望ましい条件としては、本体として、1）IBM・PCのペンティアム、2）メモリーが16ないし32MB、3）スーパーVGAモニター、4）3.5インチフロッピーディスク・ドライブ、5）CD－ROMドライブ、6）マウス、28.8バウンドのファックスモデムは、OSとしてWINDOWS95が求められている。

さらに、プリンターやMSWORDの文書の作成ができるソフトをもつことも強く求められている。そのうえ、インターネットが使用できる環境も整備しておかねばならない。プロバイダーとの契約や電話回線の使用料などは個人の負担である。

ただし、コンピュータやインターネットの普及が進んでいるため、個人で新規に購入する場合でも、また、インターネット利用のために遠距離電話の回線を長時間使用しても、それが学生にとっての負担にはならないという。

大学がこうしたコンピュータ・ベースの遠隔教育を行えるだけのインフラが整備されているだけでなく、学生もインフラの整備が負担にならないところに、オンラインでの遠隔教育は成立するのである。

4．カリキュラム

学習のスケジュールとカリキュラムをみよう。9月はじめからはじまる秋学期は15週間継続し、冬学期は1月の第1週の月曜日から開始し、同じく15週間継続する。基本的にはこの秋学期と冬学期がコースの開設期間であるが、春学期／夏学期もほとんど開設されている。この各学期15週間の間にコースの履修が完了しなければならない。

学位修得までに42単位の履修が要件とされているが、その要件を満たすには3つの方法がある。第1は、論文執筆ルートである。その場合、詳細は後述するが、5つのコア・コース（1コース3単位)、5つの選択コース（1コース3単位)、12単位分の修士論文によって完了する。通常は、この論文執筆コースを選択するのは、コア・コースを修了した後に入る場合が多い。

第2の方法は、プロジェクト・ルートである。ここでは、論文執筆のかわりに、自ら計画を建てたプロジェクトを遂行するものでそれ以外のコース・ワークは論文執筆コースと同様である。

第3の方法は、5つのコア・コース（1コース3単位)、9つの選択コース（1コース3単位）のコース・ワークを修了することである。コース・ワーク修了の後には、筆記試験と口頭試問の両方に合格することが要件である。

これらいずれの方法をとるにしても、1学業年、すなわち、9月1日から翌年の8月31日までの間に最低6単位分のコース・ワークないしプロジェクトを修了せねばならない。

他機関との単位互換は認定されているが、アサバスカ大学から学位を取得するためには、論文ルートないしプロジェクト・ルートの場合は、コア・コースから最低3コース（9単位)、選択コースから最低4コース（12単位）を履修し、論文ないしプロジェクトをアサバスカ大学で完了することが必要である。

コース・ワークのみで修了する場合には、コア・コースから最低3コース（9単位)、選択コースから最低4コース（12単位）を履修し、筆記試験、口頭試問に合格することは必要である。

では、ここで示されたコア・コース、自由選択コースとはどのような内容をもっているのだろうか。コア・コースとして開設されているのは、5コースある。コア・コースの目的は、現段階での最新の遠隔教育の知識、理論、実践に関わる内容を教授するものであり、これによって学生が遠隔教育を分析したり、評価したり、また、新たなコースを開発したりする能力の獲得を目的とするものである。ちなみに、現在開講されているコア・コースは5科目あり、それぞれのタイトルをあげれば、601・遠隔教育と遠隔訓練の導入、602・探求と意思決定の方法、603・遠隔教育のシステムデザイン、604・遠隔教育と遠隔訓練Ⅰ、604・遠隔教育と遠隔訓練

Ⅱである。これらのうち603を履修するには601を履修して単位を獲得しておくことが要件であり、同様に604の履修には603が、605の履修には601、602、603を履修して単位を獲得しておかねばならない。カリキュラムにおけるこうしたシーケンスは遠隔教育においても、いや、教師と学生とが時間と空間を共有しない遠隔教育だからこそ、学生が順序だてて学習する保証として重視されているのであろう。

選択コースは、コア・コースを補足し、基礎的な知識や理論の幅を拡げ、個々人が関心領域や問題を実践できるようになることを目的とする。どのコースも毎年開講されるとは限らないが、開講科目数は増加傾向にある。この選択コースは、コア・コースと併行して履修することができる。また、アサバスカ大学以外の機関で選択科目に相当する科目を履修することも認められており、積極的に推奨されているが、その場合には、事前にアサバスカ大学のプログラム・ダイレクターの許可を得なければならない。

さらに、学生が教員とともに特定の領域の問題について共同で研究ないし実践に従事する場合は、それも選択科目を満たす単位として認定される。これは、インデペンデント・スタディといわれている。このインデペンデント・スタディは、以前の職業経験をもとに単位を得る方法としても認められている。

基礎を順序立てて学ぶコア・コースに対して、選択科目は他機関での履修やインデペンデント・スタディなど多様な学習が推奨されていることが特徴である。このプログラムが、遠隔教育を実践する専門家の養成を目的としているため、個人の関心領域を深く掘り下げた学習ができる仕組みが設けられているのである。現在、選択科目として開講されているのは11科目であるが、学習心理学に関わる領域から、教育プログラム設計の方法、遠隔教育の技術の領域まで多様な科目が並んでいる。

5．学習方法

こうしたカリキュラムを学習する方法は、学生が自宅であるいは職場で自分のペースで自学自習できるシステムとして構築されている。印刷教材、学習ガイド、オーディオ・テープ、ビデオ・テープは一方向の教材であるが、生徒がいつでもどこでも学習できるものとしてつくられている。それ以外に、コンピュータを介した双方向性のコミュニケーションが可能となっている。たとえば、教員と学生、あるいは学生間のコミュニケーションがコンピュータ上での会議となって構成される、電子メール、ファイルの転送や添付ファイル形式による教員と学生との課題のやり取りや、学生間のプロジェクトの遂行過程のやりとり、インターネットによる図書検索などである。

コンピュータとインターネットにアクセスできる環境を整備しておくのは、まさにこうしたコンピュータを介したコミュニケーションが教育過程において主要な役割を果たすからにほかならない。それまでの一方向での教育を、非同期でありながら双方向にして学習のプロセスにおけるフィードバックを可能にした点でこのコンピュータを介したコミュニケーションの可能性は大きい。

また、教育を与える側からするとコンピュータの利用はコストを下げることに有効に働く。一旦、インフラが構築されてしまえば、オンラインで教育を流す費用はほとんど無視できるか

らである。また、遠隔地にいる教員もオンライン上での学生の指導が可能になるからである。これらさまざまな手段を用いた教育を行うなかで、学生に課されるのは少なくとも１年間に２コース修了するという要件である。さらに、それぞれのコースの修了に至る各段階の課題で毎回10ページほど（Ａ４サイズ）のレポートが課される。それを経てコースの修了に至るわけで、年間２コースの修了といっても決して容易ではない。

また、学位の終了時には、提出した修士論文に対しての口頭試問が行われる。ただし、遠隔教育という特徴をいかしてその口頭試問は電話を利用している。

これら頻繁なレポート提出や学位論文の口頭試問などは、アカデミック・スタンダードを確保することを重視した学習の仕組みであるといえよう。

論理的には２年間で学位取得に至るのだが、実際には職業生活を中断せずに学位取得を目指す者が大半のため、各学期に履修するコースを少なくしたり、特定の学期に集中して履修したりするため、平均して３～４年かかって学位取得に至るという。しかし、各学年で最低６単位を取得しないと学業を継続できず、なおかつ、それぞれのコースの成績がＢ以上でなければならないという規定があるため、職業生活と学業との両立は容易ではない。

６．学習のサポートシステム

遠隔教育において学習者がスムースに学習を継続していくためには、各種の学習の支援が必要である。MDEプログラムの場合も、他のプログラムと同様に各種の学習支援のサービスが提供されている。その代表的なサービス組織として、情報センター、学術センター、学習センター、教材セクション、図書館サービス、コンピュータ・ヘルプ・デスク、学籍担当室などがある。

情報センターは、あらゆる領域にわたる各種の問い合わせに電話で応じる場である。何をどこへ問い合わせたらよいかわからないような場合も、まずここへ電話すればその後の問い合わせ先を知ることができる。通常は午前７：00から午後４：30まで料金無料の電話で受け付けるが、それ以外には電話にメッセージを残せば、翌日対応する仕組みになっており、また、電子メールでの受付も行っている。

学術センターは、文字通り学業のサポートをするところである。アサバスカ大学では教員は、それぞれのプログラムを提供するセンターという組織に所属している。その各センターは、通常の大学ではデパートメントに相当する組織である。そのセンターにはフルタイムの教員に加えて、パートタイムの教員やチューターも所属している。教員をサポートし、学生のレポートの指導をしたり、成績を付けたり、あるいは学生からの質問に答えたりするのはチューターの役割である。教員一人がすべての学生に個別指導をすることの負担を軽減し、かつ、個別指導をできるだけ丁寧に行うためにはこのチューターの存在は必須である。各学生は自分のチューターを割り当てられ、一貫した指導を受けるようになっている。

教員やチューターへの問い合わせは、電話、手紙、ファックス、電子メール、コンピュータ上の会議室など各種ある。

学習センターでは、フォートマッコーリー、カルガリー、エドモントンの３箇所にある学習センターで各種のサービスを行っている。入学・履修・卒業に関わる書類やオーディオ・ビジ

ュアル教材が用意されており、それらの利用が可能である。

さらに学習のアドバイスやカウンセリングが受けられる。自学自習のもとで学習の進め方のアドバイスをうけたり、将来のキャリアに関する相談をしたりできるのである。

教材セクションでは、教材に関する問い合わせを受け付ける。教材の一部が欠けている、取りかえたい、教材をなくしたなどといった問い合わせに対応している。アサバスカ大学では、教材のかなりの部分を大学内で制作しており市販の教材を利用する場合は必ずしも多くはない。また、それぞれのコースごとの各種教材はまとめられて学生に配送され、学生が指定された教材を自分で収集することはない。教材を一括管理するシステムが学生の学習のスタートを容易にしているのである。

図書館サービスはいうまでもなく、各種の図書サービスをおこなっている。アサバスカ大学には約12万の図書・AV教材と約800冊の雑誌を所蔵している。それらはデータベース化されており、中にはフルテキストまでもがコンピュータに掲載されている。また、アサバスカ大学にない図書については他の図書館との相互貸借制度があって、約1～2週間で自宅に郵送される。こうしたサービスは、電話、ファックス、郵便、電子メールなどによって要請することができる。

コンピュータ・ヘルプ・デスクは、コンピュータのトラブルに関する相談を受け付ける組織である。とくに、大学院のプログラムではコンピュータを利用したオンライン上の教育の比重が大きくなるため、コンピュータのハードからソフトまで各種のトラブルへ対応することが重要になっている。電話、ファックス、電子メールを利用してサービスが受けられる。

学籍担当室は、入学に関する手続き、コース登録に関する手続き、学費支援に関する手続き、身体障害者へのサービス、成績や試験の管理を行っている。これらのサービスは電話、ファックス、郵便、電子メールなどで受けることができるが、一部サインが必要なものに対しては電子メールで受けることはできない。

これら各種の機能が遠隔で利用でき、それも通常の業務時間以外も利用でき、さらに各種のサポート機能が分散化していることに特徴がある。対面でのコミュニケーションがない遠隔学習の場合、通常の大学以上にこうしたサポートシステムを整備することが重要であり、学習を成功させる一つの大きな要因である。

7．授業料

こうしたサービスを受けるための各種の料金についてみておこう。まず、志願料として50ドル（以下、すべてカナダドル）、入学金として100ドル、授業料は3単位相当のコースが1コースが700ドルである。プログラム修了に最低必要な42単位（14コース）を修得するには700ドル×14コースで合計9800ドルかかる。これが、他のオンキャンパス型の大学院に比較すれば廉価であることはいうまでもない。

さらに、この授業料はカナダ人ないしカナダ内に居住する移住者に適応されるものであり、海外に居住するカナダ人や、カナダ以外に居住する非カナダ人や、アルバータ州に学生ビザで居住する非カナダ人の場合にはその順に高く料金が設定されている。カナダ国内に居住するカナダ人と、アルバータ州に学生ビザで居住する非カナダ人とでは3単位相当のコースの授業料

は、倍と半分の開きがある。オン・キャンパス型の大学においても、州内の学生と州外の学生、自国籍をもつ学生と自国籍をもたない学生とで授業料に差異がつけられるのは北米の大学ではよくあることだが、遠隔教育という手法によって国際的に学生マーケットを拡大している大学においても、学生の出自に応じた授業料を設定していることはある意味で興味深い。これはおそらくは州立大学という設置者による制約をうけているのであろう。

8．学費支援

高等教育の授業料を自前でやりくりする習慣が強い北米では、いったん職業についてから再び学生となる場合、その授業料の準備を自分でおこなうことはいうまでもなく当然である。しかし、オン・キャンパス型の大学に比べれば廉価な遠隔教育の授業料であっても、それをすべて自前でやりくりすることは決して誰にとっても容易なことではない。

そこで各種の学費支援の方法が教育機会の拡大のためには有効になるわけだが、このMDEの場合、プログラムの修了にかかる費用の約３分の１の補助を大学から何らかの賞として得る学生がいるという。その学生数の正確な数は不明だそうだが、決して多くはないようである。基本的には学業成績によってこれら各種の賞が与えられる仕組みが作られている。

MBAのプログラムでは、60%を超える学生が勤務先から学費の支援を受けて、半ば勤務先からの派遣に近い形で修士課程のプログラムに在籍しているのに対し、このMDEではそうした勤務先からの学費支援を受けてきている学生は、まずいないという。今後MDEのプログラムが勤務先から派遣するに値するという評価を得れば、勤務先からの学費補助というケースがあろうが、現段階ではまだそこまでの認知度はない。したがって、ほとんどの学生が授業料を自己支弁しているのが実態である。

9．教員と学生

教員は、遠隔教育センター（Center for Distance Education）という組織に所属する。教員組織は、一般の大学のような学科（department）ではなく、すべてCenterという組織に所属するのがアサバスカ大学の特徴である。この遠隔教育センターのフルタイムの教員は８人、パートタイムの教員は15人である。フルタイムの教員の専門は、教育心理学ないし教育学であり全員博士号をもっている。パートタイムの教員も同じく教育心理学、教育学、成人教育などを専門としており、13人が博士号をもっている。

学生は、このプログラムがはじまった1994年には60人の志願者から先に述べた手続きをへて20人に入学が許可された。それが、1998年には120人の志願者から80人に入学が許可されるまでに、コースの人気は上昇している。1994年から1998年までにこのプログラムを修了し学位を取得した学生は28人である。このうち、学位を取得することにより転職したものはわずか２名にすぎず、学位取得が勤務先での昇進や昇級につながっている可能性は充分あるものの、転職に結びつくとは必ずしもいえないことがわかる。

現在、学生の性別は男女ほぼ半々、年齢は40～45歳が中心であり、その年齢からしてほぼすべてが成人学生であるわけだが、その職業分布は、高等教育関係の遠隔教育従事者だけでなく、ソフトウエア会社、銀行、軍隊などで職員訓練に従事する者、あるいは政府関係機関のヘル

ス・ケアや農業部門でやはり教育訓練に従事する者など多岐にわたるという。業種として多岐にわたるこれらの学生を貫く特徴は、何らかの形で教育・訓練に従事しているということである。これらの教育・訓練が集合したかつ同期性を保つ形で行えない場合、たとえば教育・訓練を受ける従業員が各地に点在していたり、同時に教育・訓練を受けられない場合、それらの問題を克服するのが遠隔教育なのである。

遠隔教育によって遠隔教育に関する専門的な知識が得られるという特徴は、学生の国際化となってあらわれる。1999年2月現在、学位修得プログラムに175人在籍しているが、そのうち23人がカナダ以外に居住する学生である。アフリカ、フィリピン、ラオス、ニュージーランドなど世界各地に分布している。

また、非学位プログラムの学生も含めて、コースの登録人数の総計は1200人を超えている。

10. 将来計画

初めてのMDEプログラムが開始して5年を経過した。その間、順調に学生数を増やし卒業生を輩出してきたが、今後の方針について再検討する時期に来ている。2000年から始まる学期にプログラムの検討が行われる予定である。

基本的な方針としては、MDEのコースを増加しプログラムを充実させ、将来的には博士課程を置くこともターゲットとされている。

また、MDEやMBAの大学院プログラムに加えて、Master of Health StudiesやMaster of Artsのプログラムが開講される予定であり、大学院のプログラムそのものが増加傾向にある。そうした中で必要とされるのは、それぞれのプログラムのサポートシステムや管理システムの基盤を統一して、重複を避けることである。大学院プログラムの多くが、州政府からの経費の支弁に依存することなく、学生からの授業料を基盤として経営せねばならないため、サービスの充実とともに経費の節減が重要な課題となるのである。

大学経営という視点からは、大学の学位に通じる単位とはならないが、職業教育や継続教育の領域のプログラムの開発が求められている。社会的な需要の高いこうした領域への参入は経営基盤の安定化に貢献する。さらに、アルバータ州をこえた諸州の教育機関との単位互換の協定が増加し、とくにオンタリオ州との協定の増加は著しい。カナダの公開大学としての名声をあげるべく、こうした努力の重要性も指摘されている。

経営の視点を忘れずに、しかも質の高い教育の維持、これがアサバスカ大学の発展に向けての課題であろう。

【参考資料】

1．Master of Distance Education, Athabasca University （brochure）.
2．Bridging the Distance, Athacasca University （brochure）.
3．アサバスカ大学のホームページ {http://www.athabascau.ca/mde} 上の各種資料。
4．Graduate Programs （draft）.
5．Course Mini-Proposal: Using On-line Teaching and Support Technologies in Distance Education, 1997.
6．Bob Spencer （Director, Center for Distance Education）へのインタビュー。
7．Foundations of Adult Education, Master of Distance Education, MDEE611 （learning kit）.